
異世界フラグがたちました

ちょむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界フラグがたちました

【Nコード】

N1689BA

【作者名】

ちょむ

【あらすじ】

わけもわからずココードハドコデスカ？

美しき魔女様に拾われたはいいものの、もう帰れないってどゆこと？

魔女様のコネでなった宮廷医術魔法師だけど・・・
なんだか恐ろしい狼に懷かれて（もふもふは正義）
やたら美形な魔術師には迫られて・・・

モウヤダコワイ

何だかんだ言って天然な光ちゃん。

趣味は食べること、な光ちゃんが前向きに頑張っちゃう異世界なお話。

ピンチフラグがたちました（前書き）

初心者マークを身体中に貼り付けて書きたいくらいです。

駄文ですが、気楽に読んでくださいましー。

ピンチフラグがたちました

空を見上げた。

うん。凄く綺麗な青空。

ピクニック日和ですね？

わかります。

ぐると辺りを見回せば。

「ココハドコデスカ」

やたら広い草原にポツリ。

あの…すいません。

私、久保井 光（17歳）

理解不能な状況におちいりました。

まずは状況分析ですね？

ちょっと冷静ぶってみますか？

・私は今、片手にシャーペンを持っている。

・高校の制服を着ている。

・ついさっきまで数学の授業でウトウトしていた。

・ココハドコデスカ

結論。

これは夢ですね？

納得。

.....いや。

ちょっと待て。

おいおいおいなんだこのリアルさ。

夢ってこんなに感覚あったっけ？

嗚呼この吹き抜ける心地よい風！
そよそよと凪ぐ草達！

恐る恐る頬つぺたを：

「痛いじゃないかコノヤロー！」

久保井 光 （17歳）

人生にあるかないかのピンチフラグがたちました。

え。ナニソレコワイ。（前書き）

見てくださってありがとうございます。

大丈夫かなこの人的な文章がありますが、すいません…

ま、前向きに頑張るんだからネッ？

え。ナニソレコワイ。

頬っぺたが痛い…

夢じゃないんですか!?

現実!?

いやでも私ついさっきまで数学してたよ?

こんなそよそよしたところになかったよ?

アレか。

瞬間移動的な能力が開花したのか。

え?

数学でウトウトしてたタイミングで!?

取り敢えず、座ろうか。

うん。

そうしようか。

落ち着いて、座ってみましょうか？

「ふう…」

「なにこの子。凄く落ち着いてるわ！…大丈夫なの？」

「！？」

目の前で巨乳が

揺れた。

目の前に立つのは、ないすばでい、なお姉さん。

「だ…誰？」

「あら。大丈夫そうね。私はアール。貴女を呼び出したの。」

フン、と自慢気に桃色の髪を揺らしたアールさん。

フフン、じゃねーし。

「何デデスカ？ココハドコデスカ？ナンデワタシハココニイルンデスカ？」

「何でカタカナなのかしら？まあいいわ。いろいろ説明するから私の家に行きましょうか。はい、転移。」

アールさんがギュッと私の手を握ると、

「ええええええええ！！？」

ぐいん、と体が引つ張られる感覚と共に、視界が変わった。

呆然とする私の手を引いて、アールさんは森の中の可愛らしい家に招き入れた。

気付けば、良い香りのする紅茶を持たされて椅子にちょこん、と座る私。

ゆらゆらと立ち上る湯気を見つめ、カオスな頭を整理しようと試み

た。

えーとまず…

今のはナニ！？

あのぐいんってなるやつはなんだっただ！？

頭を混乱させる私を、アールさんはふふ、と笑った。

何故笑うんだ！

バカにしちゃいけないんだぞ！

こっちは必死なんだぞ！

「貴女を喚んで良かったわ。可愛らしいし、行動がおもしろいし。
…名前は何て言うの？」

アールさんが美人の微笑みをかました。

「久保井 光と申しますけど…説明、してくれますか？」

アールさんが、ニヤリと笑った気がした。

「此処は、光が住んでいた世界ではないわ。つまり…異世界、よ。」

.....。

ナニソレコワイ。

「ああ、元の世界にはもう戻れないけど私が面倒みてあげるから心配しないでね。」

.....。

ナニソレもっとコワイ。

「今日から光は私の弟子よ!!」

アールさんが高らかに宣言した。

え。ナニソレコワイ。(後書き)

あう...この後どうしようかな...

頑張るフラグをたてました。(前書き)

お餅って美味しいですよねエエエ?

関係NEEEEE!

頑張るフラグをたてました。

「いやいや全然分かりませんから。帰れないってどういうことですか？もしかして私、巷で噂の異世界トリップしちゃいました？」

自信満々なアールさんに言う。

「憧れの異世界トリップ、ヨカッタネ」

アールさんはウイंकをしてバイサインをする。

ぺしっとバイサインをはたき落として訴える。

「何勝手なことしてくれてるんですか！

あなた魔術師ですかそうですか！じゃあ私を還してくださいいいい！！！！」

ぐらぐらとアールさんの肩を揺さぶる。

まだ１７歳なのに！！

これからのに！！

大学にも行っていないのに！！

「どーしてくれるんですかあああ！！」

アールさんは哀しそうに目を伏せた。

「私…ずっと一人だったのよ。此処で、独りぼっちだったの。誰か、一緒にいてくれる人が欲しかった。巻き込んで、ごめんなさいね…」

その顔が、凄く切なくて。
ハッと息を呑んだ。

「…アールさん！私…私で良ければ一緒にいますよ！」
思わず、言っていた。

嗚呼、私のスカポントンめ…

「ホント！？嬉しいわぁ」

パッと顔を上げたアールさん。

……………
ダマサレタ。

アールさんは、魔術師だった。

ハリー・ Potter 的な W W W W W

そして、帰れない私は、アールさんの弟子となった。

べっ…別に魔術に興味があったわけじゃないんだからね！

何か帰る手口が見つかりやすいでしょ！

この世界の事も、少し教わった。

王様がいらっしゃる W W W W W

魔術が普通にあるらしい W W W W W

この国の名前はベイ国。

欧米か！ってアールさんにツッコんだら怪訝な顔された。

なんか悲しいな。

まあ

その他もろもろのことは、後から教えてくれるらしいです。

「質問は遠慮なくどうぞ！」

おおう、アールさん凄く頼もしいぞ！

「スリーサイズは！（あべしっ）」

叩かれた。

お父さん、お母さん、弟よ

帰れないけど諦めないで帰る方法見つけますから！

それまで待つてね！

こっちの世界では
楽しくやれそうです。

人生はポジティブにね！

光

P S、マリモの真理子、枯らさないでくれると嬉しいです。

手紙は届かないと思うけど…

書くだけ書いて、紙飛行機にして飛ばしましたWWWWWW

久保井 光 17歳

異世界で頑張つてみます!!!!

異世界ライフ、タノシイヨ（前書き）

いやもうなんかどうにでもなれーと
いうことです。

異世界ライフ、タノシイヨ

「光の部屋は此処よ。好きに使いなさい。」

アールさんが部屋をくれました。

木の温かな机やオレンジのカーペット。

ふかふかとした明るい緑のベッドは、ダイブしたくなりそう。

「いいですね…温かで」

アールさんは、

「そりゃそうよ！私が光のために用意したんだもの！」

…アールさん

ドヤ顔しないでください。

えーと

怒ったらいいいのか喜んだらいいのか…

用意してくれたのは凄く嬉しいよ！

いや、嬉しいんだけどね。

いきなり異世界トリップとかされて、もう帰れないと言われて
貴女の部屋は此处よ とか言われて何ですかソレ。

私、元の世界に家族居ました。

友達もいました。

彼氏は欲しかったです。 願望

それなりに女子高生してました。 でもいきなりですか!?

部屋まで用意してあるってどんだけですか!?

でもまあ、用意してもらった可愛い部屋は嬉しいです。

野宿とかやだからね!

「わ、わーい」

いろいろ考えすぎて、ぎこちない喜びになった私をアールさんは笑
った。

「ふふふ…やっぱり光で良かったわ。 あ、その格好じゃマズいでし
よう。

着替えなさい。」

サツとアールさんが手を振れば、

「おおー!」

黒のワンピースがヒラリと空中を舞った。

「こ…これは、魔女の宅 便の…！」

感激してワンピースを掴む私にアールさんが言う。

「まあ、今はこんな地味なのしかないけど…落ち着いたら私が買つてあげるわ。我慢して？」

チラリとアールさんを見る。

スリットの入ったドレスから綺麗な脚が…

え。

際どくないですか？

太腿太腿！

「光は色白だしスタイルも良いから…着せ替え甲斐がありそうね！」

アールさん、私に何を着せる気ですか？

私、ソナノキマセンヨ！

地味万歳！

アールさんが笑いながら部屋を出たあと、ぐるりと見回す。

ほっこりとあったかくなるような家具達は、私の趣味どストライク。

「はあ…」

ついこの前までテストでひーこらして、必死に眠気と戦っていた私。

いきなりですか。

まあ、魔術とか？

気になるとか、使いたいとか？

思いつちや思っんですけどね。

ちょこつとですよ？

ほんのちょこつとですから。

何もやましいことはありませんから。

でも、ついていけませんよ…

「はあ…」

もう一つため息を吐いて、制服を脱いだ。

月日が流れていくのは早いもので。

異世界の生活に大分慣れました！

最初の方こそ、夜中にひっそり目から海水とか流したりしたものの、持ち前のポジティブさで慣れました。

んで、朝が早くなりました。

まだ太陽でてないよ　って頃から生活が始まるのですヨカッタネ。

シャーッとカーテンを開けて、
ベッドを綺麗にして、

アールに買ってもらったワンピースに着替える。

あ、大胆なやつは遠慮しました。アールが大喜びで持ってきた真っ赤なドレス？

胸が見えますってば。

水を川から汲んできて顔を洗ってはあすつきりしたところで。

外に生える植物達に水をぶっかけて、朝日が昇るのを見つめる。

しばらく黄金に染まる森を見て、

パタパタと家に戻って朝食の支度に取り掛かる。

朝ごはんは

サラダを挟んだサンドイッチと

ベリージャムをのつけたヨーグルト。

あ

わけあって、お肉、食べられなくなりました。

テーブルの上に二人分セットして、真っ黒いローブを羽織ったら。

最後の難関へ！

…

キィィ…

薄暗い部屋にそろそろ足を踏み入れる。

ベッドの上で丸くなっている敵を見据えながら一気にカーテンを引くッ！！！！

シャアアアッ

「師匠起きてください！朝ですよ！」

「むう…」

毛布を頭まで被った敵^{アール}を揺さぶる。

「しーしょー！！！！…うわっ！」

ビュン、と風が部屋を舞う

頬に一筋傷ができた。

そう。

私の毎日の日課。

命懸けで師匠^{アール}を起こすこと。

死ぬよ？これ。

アールは不機嫌そうにパチンと指を鳴らす。

「えっ、ちよっ、待っ」

炎の球がこちらに向かってくる。

この日課は、寝起きの悪アールを起こすと共に、魔術の修行をする私の朝の練習の場でもある。

アールが必死に教えてくれたお陰で魔術、使えますよ私！

わあいヤッター！

向かってくる火の球に集中して、必死に魔力の流れを感じとり、薄い膜のようなものを体に纏った。
勢い良く火の球は膜にぶつかり、消滅する。

「ッ師匠！起きてください！」

叫べば、チツと舌打ちして耳を塞ぐアール。

こうなったらもうアレだ。

アレしかない。

最後の手段だ。

喉に手を当てて魔力を流し込む。

すう…

「起きてください師匠——！！！！！！！！！！」

拡声魔術で叫んだら。

「…うるっさいわね！起きるわよ起きればいいんでしょ！！！！」

気だるげにアールが身を起こした。

私は治癒魔術を使って頬の傷を治し、にっこり笑う。

「はい、おはようございます師匠。」

まるで使い魔のような私ですが、異世界ライフ、結構楽しいです。

異世界ライフ、タノシイヨ（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

最強だよもふもふ。正義だよもふもふ。（前書き）

更新不定期ですいませんです。

できるだけ頑張りますよ！

最強だよもふもふ。正義だよもふもふ。

「早いところご飯食べちゃってください師匠。」

アールの着替えを手伝って、
h s h s したとこで

アールのないすばでは
素晴らしいと思います。

鼻血がアアアアア！！

少々よろめきながら部屋を出る。

いや、あれですよ。

乙女ですから。

生物学的に に分類されますから。
アールのないすばでいを見て鼻血出したら
なんかいろいろ終わりますから。
危ないですから。

一足先に席についてサンドイッチを頬張る。

いや旨い！最高！

食べること＝生きること

ですからね！

因みにアールは料理ができません。

…一人で何食べてたの？
って聞きました。

ええ、聞きましたとも！

そしたら

「うんと…草…じゃなくてサラダとか、あとは職場に食堂があったし」

草って言った！？

今草って言っちゃったよね！？

話を聞いた私の目から海水が出てきたので、外に生えてた野菜らしきものを使って、ポトフ作りしました。

調味料塩しかありませんでした。

ナニソレコワイ。

ポトフを一口食べたアール、
目からしょっぱいポトフの汁を流しました。

それを見て凄く悲しくなって

二人でポトフの汁を流しながらポトフ食べました。

嗚呼、思い出すだけで

目からポトフの汁が…

それから、食事は私担当れす！

（・・・）キリッ

今では仕事の帰りにアールが食材を調達しています。

アールの仕事は王宮魔術師ですから。

どうでもいいけど、帰りに深いスリットの入った大胆なドレス買ってくるのヤメテホシイ。

いや、着ないから。私着ないから。

そういえば、

どうして肉が食べられなくなったのか。

それは…

「皆ーおはようー！！パンの耳余ったからあげるね！」

外に出て、私が声を上げれば。

『ヒカリちゃんアリガトウ!』

『アリガトウ!』

ぴいちくぱあちくと集まってくる鳥達。

そうなんです。

久保井 光。

17歳にして動物との意志疎通能力を開花させました。

それに気付いたのは、
異世界いっせいちに来てすぐでした。

あれは、可愛いウサギ様が迷いこんで来た時のことです。

私がいつものように

鼻歌を歌いながら草木に水をぶっかけていると…

「おや？君は可愛いうさちゃんではないですか？迷子ですか？
もふもふを堪能させてくれないかな？」

ピヨコンと白いウサギ様が
おいでになりました。

私はもふもふを愛していますから、わきわきと手を動かしながら近付いたのです。

あの時の私の顔は狂喜じみていたと考えられます。

嗚呼、想像するだけでぞぞと…

飛びかかろうと、猫さながらに身構えた瞬間、

『コワイヨ。コツチクルヨ』

「え」

周りをさささと見回して、
「誰？」

空耳だと思って、ウサギ様を見れば、耳はヘタリと垂れてガクブル

（（（（（；。 （（（（な状態。

そんな姿に萌えてにじりよりました。

ああん、たまらないイイイ！

『コワイヨ、コワイヨ、コツチクルヨ。』

「…」

今度ははつきりと聞こえ。

えっと今のは誰かな

もしかしてウサギちゃんかな

「そんなわけないよね！私ってばバカだなあ H A H A H A」

『コワイヨ、ワラッテルヨ』

「って！お前かアアアアア！！！！」

ウサギ様は脱兎の如く…

否、脱兎になりました。

ウサギ様すいません。

というわけで、

次の日、鳥に話しかけたら、
鳥フィーバーになった。

あ、皆さん、鳥に話しかける場合はご注意を。

奴ら、バツバツサくるからね。
羽で視界とかないから。
よろけるしかないからね。

しかも奴ら爪結構鋭いからね。
ちょ、待つ、痛い！とか訴えても、奴らおミソすくないから、聞い
ちやいねえ状態だから。

鳥出没注意とか看板だそうかな。

でもまあ友達、なわけ。

そんなお友達のお肉、食べたくないでしょ。

皆さんだって、ついさっきまで喋ってた友達のお肉、食べたくない
でしょ？ え。違う？

これぞまさに友食いつてか？

HAHAHA

……………寒気が。風邪かな。

ぶるりと身を震わせて、すっからかんになった鳥まみれのお皿を持つて家の中へ入る。

シツシツと鳥を払えば、

『ヒカリチャンマタクルネ』

『アリガトネ』

バツサバツサと飛んでいく奴ら。

おミソ足りないけど、

可愛い奴らだよ。うん。

チラリと時計を見れば、 9 時。

向こうと同じ時間の読みだからいいけど、異世界こせかいの時計は左回りに進む。

気持ち悪いのをなんとか押し込んで見る。

あ、9 時だ。

9 時かあ…

私、この時間は学校だったよね…。

学校、楽しかったなあ…

友達のかっちゃん、どうしてるのかなあ…

向こうに想いを馳せながら、モシヤモシヤとサンドイッチを頬張る
アールを見る。

………？

9時？

アールのお仕事が始まるのは、8時50分。

月曜日のドラマは夜の9時。

…今は？

9時。

ナニソレコワイ。

さあぁと血の気が引く。

「し…師匠…えと、今日はオシゴトないですよね…?」

ギギギ…と油の切れたロボットのよう^にに首をかしげる。

師匠がお仕事に遅刻すると、夜遅くに帰ってくることになる。

そうなれば、暗闇に恐怖を感じる私にとって、師匠のお仕事遅刻は死活問題なのだ。

ですから師匠。

お願いだから、無いと言って

「え?何言ってるの光。いつも通りよ?」

「ダウトオオオオ!!!!!!」

期待が砕かれた。

「師匠…モウダメです…遅いです…手遅れです…今9時です…or
z」

アールの顔から血の気が失せた。

「ち…遅刻じゃないの!残業!?」

ガタツと椅子を倒しながらアールがたちあがる。

「とっ…とりあえず急ぎましょう！」

慌ててアールのローブを頭に被せた。

「行つてらっしゃい！師匠！（泣）」

目からポトフを流しながら私が言えば。

「…行つてくるわ…転移」

白い光に包まれて、げっそりとやつれたアールが消える。

今日1日、凄くテンション低く過ごすことになりそうです…

モウヤダコワイ。（涙）

「はぁ…」

今日の夜はガクブルで過ごすんだと思うと気が重いです…。

肩を落とした私を心配するように黄緑色の綺麗な鳥が話しかけた。

『ダイジョーブ、ダイジョーブ。ソレヨリサ、モリノオクニオイシ
イキノミガアルンダケドイカナイ?』

?

やべ、一瞬理解できなかった。

うん、まあ、この鳥が凄くフレンドリーなことは理解できた。

「…キノミ…木の实?」

『アマクテトツテモオイシイヨ』

そつえば、ジャムなくなつたんだよね…

今日ので最後だったから…

「行く!」

ついでに沢山食べちゃおうとか下心ありありですけど、何か?

『イコウイコウ!』

鳥よ、とりあえず羽を飛び散らすのヤメレ。

「はあ、はあ、ねえッまだなの!？」

歩くこと一時間程。

何この獣道。

いや、ここまで歩いた自分に拍手だよ。

『モウチヨット、モウチヨット。』

「いやいや、君。さっきからそれしか言っていないから。」

所詮は鳥。

おミソの足りない鳥。

されど鳥。

自分に翼がないことがこれ程までに恨めしく思ったことはない。

モウチヨットという鳥さんの言葉を疑いながら、いや正直に言います。信じてません。

足を進める。

え？何？

転移魔術使えよって？

のんのんのん。
甘いですよ！

私が得意とするのは
治癒魔術と防護魔術ですヨ皆さん。

よって、移動魔術なんざ私には使えませんよって。

爆発しますから。

周り巻き込んで大規模な爆発おこしますから。

そりゃそうですよ。

魔術とかナニソレ使えんとかスゴイみたいな世界からきたんですよ？

アールの必死の授業のお陰で使える方がスゴイよ。
頑張る自分、拍手だよ。

あ、アールに苦手な魔術はないよ？

治癒魔術、防護魔術、攻撃魔術、移動魔術、空間魔術：

全部偏りなくできないと王宮魔術師なんて出来ませんからアアアア
アア！！！！

『ツイタヨ』

鳥さん、モウチョットという言葉信じてあげなくてサーセン。

嗚呼、私は今、凄く生きていることに感謝しています。

人生万歳。

木の実万歳。

鳥万歳。

「うつわ！めっちゃくちゃ旨そうやないですか！」

紅く艶やかに光るみずみずしい木の実達。

そこら中、木の実、木の実、木の実、キノミ。

「ひゃっはーーーーー！！！」

狂喜乱舞して一口食べれば、

ここまで歩いた疲れとか

夜はガクブルなんだとか

もろもろが吹っ飛ぶ。

「ああん、スゴイよ！オイシイヨ！何この口に広がる甘味！少しの酸味が素晴らしいよ！黄金比だよ！」

ラズベリーのようで

イチゴのようで

なんかもう言い表せない美味しさ！
好物の海老より美味しいよ！

『ゲンキデテヨカッタ！』

「ありがとね！」

おミソ足りないけど、ホントにいい奴！

ああもう、鳥フィーバーになったって文句言っちゃいけない！！！！
…いや言うけど。

ひよいひよいと木の実を摘んで、籠の中に入れる。

口の中にも入れる。

籠が一杯になったところで、重大なことに気が付いた。

「…う…重い。」

欲張った私が悪いんですよ。

ええ。

分かってますよ。

ドサリと籠を下ろして、キョロキョロと道具を探す。

チラリと木の実をつついている鳥を見た。

「チツ、使えねえ。」

たかが鳥、だった。

ガサガサと道具を求めて歩く。

足のしたでパキパキと小枝が小気味良い音を立てた。

『ドウシタノ、カエルノ?』

いつの間にか肩に乗った鳥がピピツと鳴く。

鳥を飼ったことのある人は分かります。
アレなんです。

凄くうるさいんです。

鼓膜が破れる!!!!

耳元で鳴くな!

鳥を肩に乗せたまま、物色していると、視界に銀色な物体が映った。

「？」

銀色のソレはフサフサとしている。

「？毛？」

フサフサが繋がる先を辿ると…

「…お、お、狼！？」

私の三倍ぐらいの大きさのビッグサイズの狼がいた。

『ワアア、ワアア、タベレチャウヨ！』

バッサバッサと羽を撒き散らしながら危険を警告する鳥。

あー、鳥臭い。

とりあえず、そろつと逃げよう。よし。

…？

何かがおかしい。

ビッグサイズな捕食者、巨体を横たえています。

ピクリともしません。

腹に斜めに切り傷が走っています。

大量の血。

違和感の正体は血か！
なあんだ血か！

「…血？」

さあぁと血の気が引く。
思わず二度見した。

「待て待て待て。アレか。死亡フラグか。」

じいつと見つめれば、浅く狼の胸が上下していることに気付いた。
え。生きてる。

『ケガシテルヨ！ケガシテルヨ！モリノセイレイサマガケガシテル
ヨ！』

バツバツサと鳥臭い。

って。

「モリノセイレイサマってヤバイじゃないか！-」

道理ででっかいワケだ。

ということとは、だ。

飯にも私、森に住まわせていただいている身。

ということは、だよ。

「助けなきゃ！」

得意な治癒魔術、ここで使わなくてどこで使うんですかっての！

『エエ！デモヒカリちゃん、コワイヨ！』

「鳥は黙ってなさい！やるっていったらやるの！」

傷口に手をかざす。

目を閉じて、魔力を探った。

ほのかに手が温かくなった。

目を開き、傷口に沿って手を当てれば、淡く光りながら傷口が閉じる。

かなり深い傷が閉じていくのを見ながら、このあとどうやって木の実を運ぼうかな、とか、暗いのやだな、とか考える。

傷口をふさぎ終わって、狼の呼吸が安定したのを確認。

Wow！

自分、頑張ったよ！拍手！

でも。

「あ、力、使いすぎた…」

狼の、傷口の治った無防備なお腹へ倒れ込む。

もふり。

嗚呼、狼の毛皮、最高、と
薄れゆく意識の中で思った。

最強だよもふもふ。正義だよもふもふ。(後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1689ba/>

異世界フラグがたちました

2012年1月5日19時49分発行